『教行証文類』の世界　第四回

# 顕浄土真実教行証文類序（二）

高田短期大学学長　栗原廣海

ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。

美しい対句で真宗の真髄を語った冒頭のこのことばに続いて、なぜこのような教えが説かれなければならなかったのかが示されます。釈尊は相手の能力・資質に応じて教えを説かれましたので、その数は説法された人の数だけあるといわれ、一般に「八万四千の法門」と言われています。その法門の一つとして、渡り難い生死の苦海を渡す大きな船であり、迷いの闇を破る智慧の光である本願成就の名号「南無阿弥陀仏」が説かれたわけですが、そのいきさつが次のように記されています。

しかればすなわち、浄邦縁熟して調達・闍世をして、逆害を興ぜしむ。浄業機彰わして、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり（ここに、浄土の教えを説く機縁が熟し、提婆達多が阿闍世をそそのかして頻婆娑羅王を害させたのである。そして、浄土往生の行を修める機がその姿をあらわして、釈尊は韋提希をお導きになって阿弥陀仏の浄土を願わせたのである）。

つまり、釈尊在世のインドにおいて、『観無量寿経』に説かれているような王舎城での悲惨なできごとがあり、それをきっかけとして救済されるべき人間が出現し、その人が唯一たすかる道として、釈尊によってはじめて本願の念仏が説かれることになったというのです。

『観経』は、苦悩する韋提希夫人の救済を通して、本願念仏による浄土の救いが私たち凡夫に確実に開かれていることを証明する重要な経典です。親鸞聖人が尊崇された七高僧について言えば、曇鸞大師が菩提流支から授けられて浄土門に入られたと伝えられる経典であり、道綽禅師が『涅槃経』の講説をさしおいて浄土門に入られる機縁となった経典でもあります。また善導大師はこの経に註釈をほどこして『観無量寿経疏』を著され、法然上人はその善導大師を「偏依善導一師」と仰いで専修念仏の道を歩まれました。そして、法然上人のこの善導大師に対するのと同様の念を親鸞聖人は法然上人に対してもたれ、師の念仏の教えに生涯を生きられたのでした。

ここで、『観経』において、「浄邦縁熟」に導いた「王舎城の悲劇」を概観しておきたいと思います。

『観経』冒頭に次のように説かれています。

その時、王舎大城に一太子あり、阿闍世と名づく。調達悪友の教えに随順して父王頻婆娑羅を収執し、幽閉して七重の室内に置き、もろもろの群臣を制して、ひとりも往くことを得ざらしむ（そのとき、王舎城には阿闍世と名づけられるひとりの太子がいた。彼は悪友提婆達多の教えにしたがって、父である頻婆娑羅王をとらえ、七重の室内に幽閉し、群臣たちを制して、ひとりもそこへ行かれないようにしていた）。

阿闍世が提婆達多にそそのかされて父の王を七重の牢獄に閉じこめ、餓死させようとするという、大変恐ろしい場面からストーリーが始まっています。しかし、阿闍世がどうしてこのような凶行に及んだのかについては『観経』には説かれていません。善導大師の『観経疏』には詳しく説明されていますが、煩雑になるので、ここでは省略い

たします。

さて、その後のストーリーの展開は次のとおりです。

大王を敬愛していた王妃韋提希夫人は、水浴して身を清め、乳製品と蜜を麦粉に混ぜて身体に塗り、胸飾の中には葡萄の飲料を入れ、ひそかに王にさしあげました。そこで大王は麦粉を食べ、葡萄の飲料を飲み、水を求めて口をすすぎ、口をすすぎおわるとうやうやしく合掌して耆闍崛山の方に向かい、はるかに世尊を礼拝して次のように言います。

「目連は私の親友です。願わくは慈悲の心をおこして私のもとへ遣わしてくださり、八つの戒をお授けくださって、仏道を歩もうとする者の心構えをお教えください」

言い終わるやいなや、目連は隼が飛ぶようにすばやく王のところにやって来ました。目連は毎日毎日このようにして王に八つの戒を授けました。世尊はまた富楼那長老を遣わして、王のために法を説かせました。こうしているうちに二十一日が過ぎました。

王は蜜入りの麦粉を食べ、法を聞くことができたので、顔の色はおだやかで喜びに満ちていました。

あるとき、阿闍世は門番に尋ねます。

「父王はまだ生きていられるのか」。

門番は答えました。

「大王よ、大夫人は体に麦粉と蜜を塗り、胸飾の中に飲料を入れて、王に差し上げています。また、沙門目連と富楼那とは空からやって来て、王のために説法しております。これらを禁制することはできません」。

阿闍世はこの言葉を聞くと、賊の伴侶となっている母もまた賊だと決めつけ、剣をとって母に危害を加えようとしました。そのとき、月光という聡明で智慧のある大臣が、耆婆とともに、父を殺して王位についた悪王はたくさんいるが母に危害を加えた人のことは聞いたことがないと、いのちをかけて阿闍世の凶行を制止します。

王は母に危害を加えることは思いとどまりましたが、奥深い部屋に幽閉し、ふたたび外に出られないようにしてしまいました。

自分まで幽閉されてしまいますと、王をたすける者はもうだれもいなくなります。韋提希夫人は憂いに閉ざされ憔悴して、はるかに耆闍崛山に向かい、悲しみの涙を落として仏を礼拝し、たすけを求めました。

韋提希夫人がまだ頭を上げないうちに、耆闍崛山におられた釈尊は夫人の願いをお知りになり、目連・阿難とともに王宮においでになったのでした。

韋提希夫人は釈尊の姿を見るや、自ら胸飾りを引きちぎり、大地に身を投げ出して、号泣して釈尊に申し上げました。

「世尊よ、私は昔何の罪があってこのような悪い子を産んだのでしょうか。世尊もまたどのような因縁から提婆達多のような者と親族なのでしょうか」。

自らの所行の罪深さへの内省もなく、阿闍世の悪行についての自己の責任には思いもおよばず、全く無責任な言葉を釈尊にぶつけているのです。さらに、提婆さえいなければ、そのかされてこのようなむごいことを阿闍世がするはずはなかったのに、その提婆とあなたは親類でいらっしゃると、的はずれなことを言って尊崇する釈尊にまで責任をなすりつけようとしているのです。

このような愚かで浅はかな凡夫韋提希に対する教えは、浄土の開示以外にはなかったのです。